

令和5年度（2023年度） 大分大学一般選抜試験問題

出題の意図

小論文

(福祉健康科学部)

※この出題の意図についての質問・照会には一切応じません。

- 1 現在、コロナ禍や戦争など、世界は不条理で殺伐とした状況下であり、わが国は、少子高齢化の問題や経済の停滞などの重苦しい現実も抱えている。次世代を担う若者は、何を考え、これからどのように踏み出していけばいいのか、希望を見出せない時代に生きているといっても過言ではないだろう。

今回の出題は、「希望を単なる個人の心の持ちようとして考えるだけでなく、個人を取り巻く社会のありようと希望の関係」を明らかにしようと2005年から東京大学社会科学研究所を拠点に始まった「希望の社会科学（希望学）」の研究者である玄田有史氏の書籍を引用・抜粋したものである。

本学部で学ぼうとする受験生には、「希望は与えられるものではなく、自分たちの手でみつけるものである」というような「生きる力」に係る視点をもった上で、アドミッション・ポリシーに掲げられた「地域包括ケア」のリーダーとして、成熟した福祉社会の実現に寄与してもらいたい。

その意図をもって、本出題では、「地域再生」というテーマで、本学部が求める学生像としての「生きる力」を、論理的な思考力を伴って表現できているか、という視点で「確かな学力」を評価する。

- 2 図1の新体力テストの推移から、高齢者の身体機能は、数十年前と比較しても年々高くなり、若返りが生じているといえる。また、患者数（医療費の公費負担）も減少している（図2）。したがって、個人の身体機能等の健康寿命の延伸の一定の効果は認められている。他方、介護等に必要な社会保障給付費については年々増大しており（図3）、財政の逼迫も問題視されている。高齢者の健康寿命の延伸が認められる中、社会保障給付費が増えている現状を分析し、今後の課題について多面的に考察してもらいたい。

- 3 高齢者の孤独・孤立問題を解決する方法として、地域社会への参加、世代間の交流を促進することが課題となっている。世代間の交流について、どのような取り組みが必要なのか、自分の考えを具体的かつ論理的に述べる表現力を問う。

その一方で、高齢者は世代間交流に必ずしも積極的ではないというアンケート結果がある。この問題に配慮しつつ、世代間交流の取り組み策を実施する上での課題をどのように述べるのかをみることにより、他者への思いやりなど福祉専門職としての資質を問うことを意図している。